

一般演題 教育・その他 OP8-4 高気圧酸素治療室での患者対応力向上に向けた取り組み

○新家和樹 藤田智一 松風 瞳 山之内康浩
窪田興二 新美倅太郎 今井大輔 竹内文菜
細萱真一郎

医療法人豊田会 刈谷豊田総合病院 臨床工学科

【はじめに】

当院では第1種装置を2台保有しており、高気圧酸素治療を一日平均6件程度、年間1,600～1,800件実施している。新人スタッフなど新たに治療に携わるスタッフは年間2～5名程度おり、漠然と患者対応に不安を抱えていると意見が挙がり、業務上の問題点を洗い出すためスタッフへヒアリングを実施した。その結果、患者移乗の際に正しく実施することができず骨折したアクシデントが発生したこと（事例①）、またボディチェック時に異性の患者に触れることに抵抗がある（事例②）との意見があり、対策を検討し実施したため報告する。

【方法】

事例①：85歳女性。急性末梢循環不全にて高気圧酸素治療開始依頼あり。女性スタッフ1名で移乗の際にベッドへ腰を乗せようとしたところ腰が乗らず、膝を曲げた状態で座り込む形になり骨折した。事例発生後、高気圧酸素治療に従事するスタッフで原因分析を行い、高気圧酸素治療実施前にADLの把握の決まりがないこと、移乗方法の知識・技術不足が原因として考えられた。そのため、移乗方法の知識・技術に関して体の構造を熟知しているリハビリテーション科のスタッフへ勉強会の開催を依頼し、移乗前や立ち上がり際のチェックポイント、移乗する際の注意点に関してのOJTを行い、車いすの移乗や全介助の必要な患者の移乗に関してOJTを行った。その後スタッフへアンケートを実施した。

事例②：患者の持ち物チェックの補助として金属探知機の導入を検討した。医療用、警備用金属探知機、磁針器など様々な用途の機器をデモ機として使用し、反応性・使用感を評価した。

【結果】

事例①：スタッフへのアンケートの結果、人体構造の理解が深まり、移乗に際して不安が減少したとの意見が得られた。また、実践形式で教育を行うことで、自身の手技に対するウィークポイントの発見や力任せによる患者移乗の減少、スタッフ自身の体に対する負荷軽減につながった。今後の要望として、患者移乗に関する知識の維持・向上や新人スタッフ向けの定期的な勉強会開催を希望する意見が

あり、年1回の定期的な勉強会を行うこととした。

事例②：反応性の評価として、実際に患者が持参する可能性がある物品をランダムに身につけて金属探知機が反応するか、また誤探知を防ぐためストレッチャーや車いすの反応性を確認した。使用感の評価として、感度や音量を調査し、患者が不快感を与えないか確認した。以上の観点から患者使用に適しているものを選択し導入した。導入するにあたりすべてのスタッフが同条件で実施できるように金属探知機の使用方法のマニュアルを作成し、金属探知機の使用法の勉強会を実施した。

【まとめ】

患者移乗の勉強会を実施し、多くのスタッフから有意義な研修であったとの回答が得られた。また、技術の定着化のため継続的な教育の実施を求める意見もあった。メディカルスタッフはそれぞれの強みがある中で、多職種間の連携をとることでより質の高い医療に貢献できると考える。

また、金属探知機を用いることで、異性の患者に触れることに抵抗があるスタッフに対して患者に触れる回数を減らすことができ、不安感を軽減できた。治療室は個室であり、患者トラブルの軽減にも寄与されると考える。